

主任技師住田義夫が経験した大阪市水道

日本の水道事業黎明期における先進技術者住田義夫が経験したもう一つの事業 大阪市水道はおよそ以下ようでした。

1889年(明治22)年の市制施行により誕生した大阪市は、淀川と大和川に挟まれた河口部を埋め立てながら発達してきました。当時、地下水は上町台地の一部を除きほとんど飲料に適さず、市民の多くは川水を飲用としていました。川水には生活排水等も流入して非衛生的でした。

1877年(明治10年)、1879年(明治12年)、1886(明治19年)のコレラ大流行や1890年(明治23年)「新町焼け」と呼ばれる大火で衛生面や防火の見地から水道敷設の要望がおこり、1891年(明治24年)桜の宮に水源地を設置し、大阪城天守閣東側の貯水池から自然流下方式で水を供給することが決まり、1895年(明治28年)に桜の宮水源地が我が国4番目の近代的水道として、また国内初の水道法規として制定された水道条例に基づく最初的水道として完成しました。(1日最大給水量：51,240 m³)

しかし、1897(明治30年)の大阪市第1次市域拡張に起因する人口増加は水不足を招来し、大阪市は水源地拡張の必要性に迫られ、桜の宮水源地の代替地として1908年(明治41年)柴島に敷地を買収し、当時、高地がない都市部の水道供給方法として欧米でのポンプ圧送方式による給水を採用し、水源地設置工事を開始しました。1914年(大正3年)に完成した柴島浄水場は1日最大給水量151,800 m³の設備を持ち、当時東洋最大規模の水源地が誕生しました。現在の柴島浄水場の1日最大給水量は1,180,000 m³で、庭窪浄水場(1日最大給水量：800,000 m³)、豊野浄水場(1日最大給水量：450,000 m³)と、3つの浄水場を合わせた1日最大給水量は243万m³となりました。

住田義夫は東洋最大規模の水源地やポンプ圧送方式を経験したのです。

1914年(大正3年)4月、水源探しに失敗を重ねていた奈良市は大阪市水道の成功経験者住田義夫に年俸1,300円給与、月手当35円給与で奈良市上水道技師として辞令を出しました。ちなみにこの年の市の水道関係予算は5,000円でした。いかにして奈良市が住田に行き会い就任交渉をしたか、年俸と月手当の仕組みなども興味あるところですがわかりません。

住田主任技師を頼りに奈良市はそれ迄検討してきた佐保川の貯水池案や大規模井戸案に代えて、木津川で取水する水道計画を立案、成功させたのです。これは大阪市の淀川取水による水道事業を経験した技術者の力が大いに生かされた事業であったと考えます。

しかし、住田は 1916 年（大正 5 年）1 月事業着手の直前死亡しました。市はその功をたえ遺族に 409 円を贈りました。

後任の水道技師として安田靖一に年俸 1,500 円給与、月手当 35 円で辞令を出しました。

日本水道事業の黎明期の水道技術者という人材は実に貴重であったことがうかがえます。

参考文献

大阪市公式ホームページ 大阪市水道のあゆみ

https://www.city.osaka.lg.jp/suido/cmsfiles/contents/0000533/533750/R1_05.pdf

奈良市水道局：奈良市水道 50 年史 1973. (73p、100p)

(文責：齋木亮一)